

## 〈研究会レポート〉

### マヤ・ツォツィル語で書く女性たちの物語

### La narrativa de mujeres en lengua maya tsotsil

ミケル・ルイス

Mikel RUÍZ

翻訳：鋤柄史子

#### I 研究会概要

##### タイトル：

マヤ・ツォツィル語で書く女性たちの物語 La narrativa de mujeres en lengua maya tsotsil

##### 開催趣旨：

本研究会では、メキシコの作家、批評家、文学研究者であるミケル・ルイス氏<sup>1</sup>とオンラインで繋ぎ、ツォツィル語（メキシコ、チアパス州）で書かれる文学の現在地についてお話いただいた。ツォツィルの現代文学に関して日本語で書かれた媒体は数少ない。他方で、マイノリティ文学、周縁の文学、先住民文学など、さまざまな概念を用いて呼称される複数の地域で生まれる多様な文学を、現代の文学空間において位置づけようとする試みは近年ますます活発になっている。こうした傾向を踏まえて、まずはミクロな視点からより解像度を上げてツォツィル作家たちの現在進行形の文学実践の姿を提示する必要があると考えた。こうした問題意識の下、ルイス氏の講演を日本語に訳して記載することにした。脚注には訳者による補足を適宜記している。講演の概要は以下の通り。

「メキシコでは21世紀半ば以降、女性の手で書かれたツォツィル語の物語が現れてきている。その代表が、詩人として長いキャリアを持つルペルタ・バウティスタ、そしてクリ

---

<sup>1</sup> Mikel Ruíz. チアパス州サン・フアン・チャムラ出身。2007年よりツォツィル語とスペイン語で文学活動始める。作家としてこれまでに、『流浪する子どもたち *Ch'ayemal nich'nabiletik / Los hijos errantes*』（2014）、『コウモリの猛威 *La ira de los murciélagos*』（2021）、『死者の影—ささやき— *Los disfraces de la muerte*』（2025）などを刊行。一作目は英訳されてアメリカでトリリンガル版としても出版された（2023）。2023年には「ネサワルコヨトル文学賞」を受賞。受賞作品『夜が始まる *Sk'ak'alil ayan li ak'obale / El origen de la noche*』は今年2025年に刊行された。また、編者としてツォツィル若手作家たちの短編小説集『傷をもつ物語 *Yayijemal ts'ibetik / Cuentos con cicatrices*』（2023）などを手掛ける。同時に、Ojarasca (La Jornada)、Confabulario (El universal)、Tierra Adentro など、メキシコ国内の多数のメディアで批評活動を行っている。さらに、サン・クリストバル・デ・ラスカサス市で文学ワークショップを主宰し、先住民の若手作家育成にも力を注いでいる。

スティーナ・パティシュタン・ロペスだ。前者は 2023 年に小説『イシュバラムエク *Ixbalam-ek' / Estrella jaguar*』を発表した。この作品は、先スペイン時代の世界を再現したものだが、その中心となる人物は、敵国との戦争で殺された夫の代わりとなることを余儀なくされた若い女王だ。後者は 2024 年に『チウレラル *Ch'ulela*』と題した初の短編集を発表している。この短編集では、不吉な感覚を体験する登場人物や、日常生活を変化させる超自然的な要素とともに、現在の問題を取り上げている。」

日時：【メキシコ】8月1日（金）／【日本】2025年8月2日（土） 場所：オンライン  
主催：Promis 研究プロジェクト「チアパス高地（メキシコ）の人類学と文学から考える「先住民」の枠組み」（代表：鋤柄史子）

## II 講演全訳（研究会報告）

### 元来の言語で文学を書くこと

この場でお話できることを大変楽しみにしていました。今日は、これまでの読書体験や研究成果にも触れながら私なりの文学批評を述べていきたいと思いますが、その柱となるのは元来の言語（*lenguas originarias*）で書かれた文学です。この文学の発展における興味深い事象について、とくにチアパス地域のツォツィル語に焦点を絞ってお話します。ツォツィル語は私にとっても母語です。ただし、皆さんと共有するこの場ではスペイン語で話をしていきます。

私は、メキシコにおける元来の言語による文学的記述という主題、そしてそれに対するアプローチのあり方について大きな関心を寄せています。これは、メキシコに限らず、他の国々や他の大陸にも関わりのあることですよね。その土地で元来話され、今日のコミュニティにおいても聞こえてくる言語がどのように文字として活用されているのか。ここでコミュニティという言葉で言及しているのは、国家にとって公用語ではないものの、複数の人々や家族にとって自己のものである言語が存在し、その言語が日常の空間、家や仕事や多くの場所で話される生活空間のことです。

これらの言語は元々話されていた場所から移行し、別の環境つまり文字空間においても活用されてきました。学術的な研究もその範疇にありますが、ここでは芸術的創作、文学的記述において取りあげていきます。この文学空間における言語の活用についての説明は一筋縄ではいきません。というのは、他の国々とちがって――その違いは実際のところ微々たるものではあるのですが――メキシコでは元来の言語で文学を書く行為が始まったのは、それほど昔のことではないのです。ここで私が示そうとしている時間というのは 30 年にも満たない期間です。元来の言語で書かれた本が現れるのは 90 年代に入ってからで、本という媒体で言語を可視化する、つまり本という形式で文学創作を行うというのは私たちにとってごく最近の話なのです。本というのは、近代以降に印刷技術の産物として私たちが知るものであり、近年ではデジタル版も出現してきていますが、いずれにせよ本というメディアで先住民の母語、元来の言語が表されるようになったのはまったく遠い過去の

ことではない。ここで明確にしておきますが、「先住民言語」であれ「元来の言語」であれ、これらの定義は西歐的視点によるものです。話を戻しますと、元来の言語で書かれたテキストだって、もちろん空間的・時間的に異なる次元に到達することができます。この文学を辿る道程の入り口をこれから一つ挙げていきますが、もちろん他の方法や別の角度から話すことも可能です。私にとってはこの道程が興味深く思えたのです。

まずその第一歩として、元来の言語による記述として重要だと考えられる先例を示していきましょう。その先例の一つは『ポ波尔・ブフ *Popol Vuh*』<sup>2</sup>として今日知られているものです。この本ではアルファベット記号を用いてマヤ・キチェ語が表記されていますが、この表記方法は今日においても利用されています。このことはとても重要で、今日私たちが文字としてとらえているモノやその体系となるテキストで元来の言語が表された先駆的な事例です。マヤにはこれ以外の文字体系が存在したことはご存知かと思います。古文書であったり石碑であったり、書物と呼べるモノが他の形態で成立していたのです。それらはある意味で、今日私たちが用いている文字、アルファベット記号を使った文字とは異なる記号を介して言葉を表現する空間だった。そしてマヤの世界については、アルファベット表記の文字に関する事象はとくに『ポ波尔・ブフ』を始点に考えることができるのです。『ポ波尔・ブフ』は、メキシコも含めてイスマノアメリカのあらゆる地域で読まれています。残念なことにその多くはスペイン語版となっています。マヤ・キチェ語からスペイン語へと翻訳された『ポ波尔・ブフ』を私たちは手にしている。私たちの多くがこのマヤ・キチェ語について学んでこなかったことは残念なことです。少なくとも私は学ばなかった。他方で、時間的な隔たりについても考慮しうるでしょう。『ポ波尔・ブフ』が書物として体系化された時代から今日まで、その長きにわたる期間のなかで言語そのものにも変化があったと言えます。

また、今日のマヤ語表記に関するもう一つの先例として、『チラム・バラム *Chilam Balam*』<sup>3</sup>という書物を挙げるすることができます。ご存知のように、『チラム・バラム』は複数のテキストがまとめられたもので、メキシコ・ユカタン地域のマヤ語で書かれています。現在この編纂物は一冊の本として流通しています。皆さんの中には他の事例が頭に浮かぶ方もいるかもしれませんが、私にとってこの二つは、今日私たちが触れることのできる物語について語るうえで最も重視すべきものであり、さらには、文学の入り口を探る指標となりえるものです。

『ポ波尔・ブフ』に戻りましょう。この物語は、これから紹介する文学作品にとって、現代の文字表記のこと以外にも重要な関わりを有しています。『ポ波尔・ブフ』とはなにか、その内容がどんなものであるのかは、ここにいる多くの方がご存知かと思います。ここで要点となるのはその語りです。つまり、世界を創造し、最初の人間を創造し、英雄譚を述べるという神話的創造についての語りです。『ポ波尔・ブフ』は、単にマヤ世界の歴史を記録した先例として価値があるばかりではなく、この文化圏に属する私たちにとっては、その語りが文学的で詩的で、想像的な性質を有していること、出来事を理解するため想像力を求める読み物であることに意義があるのです。この本の中に広がる世界へは、想

---

<sup>2</sup> アドリアン・レシーノス原訳、林屋永吉訳『マヤ神話 ポ波尔・ブフ』(1977、中央公論新社)

<sup>3</sup> ル・クレジオ原訳・序、望月佳郎訳『マヤ神話 チラム・バラムの予言』(1981、新潮社)

像力が発揮されうる状態にあり、出来事や人物たちの行動が頭に浮かぶことによってはじめて入りこむことができますよね。

ここまで、先例となる二つの書物を紹介してきました。ここからもう少し本題へと歩みを進めていくことにしましょう。

マヤ・ツォツィル文学に影響を及ぼした人物：カルロス・モンテマヨールとホセ・アントニオ・レジェス・マタモロス

今度は、マヤ・ツォツィル文学に的を絞り、その先駆けとなる存在について見ていきます。これは私がつねづね考えていることですが、ある一定の影響をおよぼした人物としてはとくに以下の二人の名を挙げるができるでしょう。一人はカルロス・モンテマヨール<sup>4</sup>、メキシコの作家であり社会活動家として知られている人物です。モンテマヨールの功績は、作家としての活動にとどまらず、マヤ系言語の記述を積極的に推進したことにも及びます。私の知る限り、彼はメキシコの政策現場で、とくに文化や言語に関するプロジェクトを遂行した先駆者のうちの一人です。そのプロジェクトとは、先住民作家の活動の活発化を促し、説話や伝説など文学的な世界観にふれることができる物語を話者の手で記録媒体に残そうという試みでした。モンテマヨールが行ったこのプロジェクトは「現代マヤの文学」(letras mayas contemporáneas) と呼ばれるもので、その一環としてワークショップを国内のいくつかの地域で開催していました。開催地域のうちとくに反響があったのが、ユカタン、カンペチェ、キンタナ・ロー、オアハカ、チアパスなど南部の地域でした。北部はあまり活動の記録がなく、もちろん北部にも先住民はいるのですが、このプロジェクトに名前が載っている作家はいません。

カルロス・モンテマヨールのワークショップは、80年代に行われています。上記の州で若者向けに短期で開かれていました。参加者にはみずからの言語で書くことを促す一方、文学ジャンルや様式に関する知識を深く求めることはしませんでした。モンテマヨールにとって重要だったのは、参加者一人一人が語りたいと望む主題について書くことにあったのです。このプロジェクトの枠組みで三つのシリーズが刊行され、シリーズを合計すると百冊以上におよぶ本が出版されました。このプロジェクトに参加した、いわゆる先住民の作家というのは、文学的な知識も経験もなく、なかには学校を出ていない人たちも混じっていた。そんな状態ではあったものの、何かしらの方法で言葉を綴った。このシリーズに収められたエッセイや物語や説話や詩には伝統的な祈祷の詞の形式がみられます。そして、

---

<sup>4</sup> Carlos Montemayor (1947–2010)。チワワ(メキシコ)生。モンテマヨールが編纂したマヤ系言語のテキストは、本文で紹介される「現代マヤの文学」シリーズ以外に、マヤ・ツォツィルのハシント・アリアスとの共編『深奥の声 先住民言語のメキシコ文学集 *La voz profunda: Antología de la literatura mexicana en lenguas indígenas*』(2004, Joaquin Mortiz Editorial、未訳)、ドナルド・フリッシュマンとの共編『真なる人々のことば メキシコ先住民言語の現代作家作品集 *Words of the True Peoples/ Palabras De Los Seres Verdaderos: Anthology of Contemporary Mexican Indigenous-language Writers*』(2005, University of Texas Press、未訳)などがある。ただし、この二冊ともに「現代マヤの文学」シリーズから抜粋された作品がいくつか含まれる。

祈祷であれ説話であれ、その伝統的な形式で書かれたものの多くを、カルロス・モンテマヨールは文学テキストとしてとらえたのです。

つまり、カルロス・モンテマヨールがこの刊行物において主題だと考えていたのは、文学的形式（ジャンル）にかかわらない記述そのものでした。この文学形式という問題はこれまでに議論されてきたことであり、今も議題にあがることですよね。どこからどこまでが物語の領域なのか。エッセイの領域の範疇とは。小説もまた形式について議論されてきた。けれどモンテマヨールにとってそれは問題ではなかった。彼が重要視したのは、人々の知識を書物という媒体で記録に残すこと、それが伝来の知識や記憶を収めた資料として活用されることにあったのです。この伝来の知識というのは、世界創造や人間の創造、村の起こり、その歴史など、一つのコミュニティの中である程度共有されていることです。「現代マヤの文学」シリーズの刊行物には、史実に限らない歴史や宗教的儀式の場で発せられる伝統的な祈祷の詞がありました。モンテマヨールは、プロジェクトを通してそうした言葉を集め、本というモノ、媒体にまとめたのです。これが、まずマヤ・ツォツィル語の文学にとって一つ目の重要な出来事です。

このように、80年代から90年代にかけてモンテマヨールは人々に書くこと、作家となることを促しましたが、本を出版する際、その人の名前がその本の作者として記載されるよう配慮してもしました。80年代以前を振り返るならば、カルロス・モンテマヨールの前にも口頭伝承の書き起こしに関わるプロジェクトというのにはありました。これらのプロジェクトの多くは学術機関が企画したもので、モンテマヨールのそれとは目的を異にしていました。外国の資金で成り立つプロジェクトも多くあり、人類学的な視座で取り組まれていました。それに対してカルロス・モンテマヨールの考えは、先住民の作家たちがみずからの言語でみずからの想像的世界を描き出し、それがメキシコ社会に根づくことにありました。また、前提として、その出版物には作家たち本人の名前を記載することを考慮していました。というのは、当時「先住民作家」は世に存在していなかったからです。たしかに神話や伝説などの記述は以前からありました。けれど先ほど言及した学術的成果物のような出版物には、先住民は作者としてではなく訳者や仲介者として位置づけられていたのです。作者としてクレジットがあったのは、本を編纂した研究の責任者たちだった。そう、出版物の著者となったのは彼らであり、スペイン語や英語へと翻訳を行った原語の話者たちではなかった。それが、カルロス・モンテマヨールが現れて変わったのです。もちろん、モンテマヨール以外にもそういった人物はいました。たとえば、ユカタン地域にはドナルド・フリッシュマン（Donald Frischmann）という研究者がいます。彼はこれまでマヤの口頭伝承を収集するプロジェクトを行ってきました。ただ、フリッシュマンはユカタン地域のみで活動していたのに対してモンテマヨールは他の多くの地域にも活動の領域を広げており、数多くの街でこうした作家の活動をまとめようと動いていました。モンテマヨールは百冊近い本を出版し、70から80人の作家を生み出したのです。というのも、この三シリーズの中には一冊以上の本を出した作家もいるし、一冊のみにとどまった作家もいるからです。

カルロス・モンテマヨールの後、チアパスに限って言えば、ホセ・アントニオ・レジェ

ス・マタモロスが現れます<sup>5</sup>。メキシコシティ出身の作家・知識人で、モンテマヨールと同じく社会活動家でもありました。より正確に言えば、サパティスタ（EZLN）の名で知られる集団の武装蜂起が起こる以前からチアパスで別のゲリラ集団の一員として活動していました。ご存知のように、この時代には劇的な変化というものが生じており、マタモロスも例外なくその変化を経験します。そして、この地域の政治情勢や社会問題を知るうちに最終的には、ゲリラ兵としての役目を終えてチアパスにとどまることにしたようです。マタモロスがチアパスに拠点を移したのは 93 年なので、EZLN が蜂起したちょうど同時期に、そこに居合わせたと言えます。

マタモロスは文学や芸術全般を愛する人物でもありました。その活動において特筆すべきことは、教育施設を創設したことです。その施設は SOGEM という略称で知られるメキシコ作家一般協会（la Sociedad General de Escritores de México）に属する作家養成学校です。チアパス州サン・クリストバル・デ・ラスカサス市に創られ、スペイン語の作家も元来の言語の作家も受け入れた学校です。このことは、マタモロスが本を作る前段階として技術を学ぶための場所を創設したことを意味しますが、マタモロスの言葉で表すならば、そこは各言語の話者をその言語記述の「職人」にする（profesionalizar）場所でした。つまり、カルロス・モンテマヨールがあらゆる語りを記録することに従事した際、様式や文体に注意を払わず、修辞性を考慮することなく、とにかく伝来の知識を本に収めようとしたのに対して、マタモロスは言語が有しうる修辞性について熟考しようとしていました。また、元來言語の話者にもスペイン語話者と同様に門戸を開き、詩、短編小説、中長編小説、ルポルタージュ、戯曲などといった異なるジャンルにおける記述法について講義を行いました。この学校が始まったのは 93、94 年頃で、それは 2009 年まで続きます。毎年修了コース（diplomado）と呼ばれる一連のセミナーがあり、09 年の最後の修了コースまで、およそ 15 回実施されました。このコースの出身者には、現在作家として現役で活躍する者が複数います。文化芸術の催しに出演したり、本をいくつも出版したり、数々の賞を授与されたりした者たちがいるのです。

マタモロスが修了生とともに初めて手がけた本は、『呼び覚ます言葉、五つの声、五つの詞 *palabra conjurada, 5 voces, 5 cantos*』（1999）です。この本には以下の五人が名を連ねます。ツェルタルの小説家ホシアス・ロペス・ゴメス・クアナ（Josías López Gomez K'ana）、 Chol の詩人ファナ・カレン・ペニャテ・モンテホ（Juana Karen Peñate Montejo）、それからツォツィルの詩人二人、エンリケ・ペレス・ロペス（Enrique Pérez López）とルペルタ・バウティスタ・バスケス（Ruperta Bautista Vázquez）、そしてツォツィルの小説家ニコラス・ウエット・バウティスタ（Nicolás Huet Bautista）です。この本の五人の著者は修了コースに定期的に顔をだしており、それに加えてマタモロスが個別に主宰するワークショップにも参加していました。その結果、最良の成果として五人の作品が選出されたのです。

---

<sup>5</sup> José Antonio Reyes Matamoros (1960-2010)。メキシコシティ生。チアパスに居住したおよそ 20 年の間、作家の育成に尽力した。ミケル・ルイスもマタモロスの文学ワークショップに参加している。マタモロスの死後、同志や弟子によって活動は引き継がれ、「草分け ホセ・アントニオ・レジェス・マタモロス Abriendo caminos José Antonio Reyes Matamoros」という文化集団が立ち上がった。現在も活動は続いている。

モンテマヨールとの違いとしてあらためて強調したいのは、モンテマヨールが手元に届くテキストはどんなものであれ世に出したのに対して、マタモロスが作品の選定方法について念入りに考えながら工程を踏んだことです。みずから基準を定め、その基準を満たす作品、文学的な質を備えた作品を選定することを心がけました。文学的な質に関して議論する際、それはスペイン語による文学創作に限られたものではない。チアパス元来の言語による記述に取り組みはじめてからマタモロスが重視したのは、ツォツィル語やツェルタル語、 Chol 語、トホラバル語など、チアパスのどんな言語で文学創作を行う場合も、あらゆる言語で書かれてきた優れた作品と同程度のレベルを目指すべきだという考えでした。他方、モンテマヨールが質や芸術性に関わる議論を重視することは決してなかった。彼の関心はそこにはなく、別にあったのです。この二人の人物は、一方で文化政策の架け橋となる役割を果たしたという点で共通しており、他方では、文学への扉を開くために各々が大きく異なる手段を講じたと言えるでしょう。

#### マヤ語で物語を書く女性作家たち

では、ここから、メキシコで物語の道程を辿った 3 人の女性について話をしていきます。カルロス・モンテマヨールもホセ・アントニオ・レジェス・マタモロスも多くの本を出しましたし、そこには様々なジャンルが収められていましたが、とくに多かったのがいわゆる詩として知られている西欧の形式で書かれたものでした。他方、小説に関しては元来の言語で書こうとする女性はかなり限られていました。

まず、2 人の名を挙げましょう。ルペルタ・バウティスタとソル・ケ・モーです。ルペルタ・バウティスタ・バスケスは、後ほど詳述しますが、駆け出しの頃から最近まで詩作を多く発表してきました。ユカタンで活動するソル・ケ・モーは詩も発表していますが、当初から物語の創作に従事しており、すでに多くの小説を刊行しています。ルペルタ・バウティスタとソル・ケ・モーの共通点としては当初詩を書いていたこと、そして、メキシコやアメリカ大陸で有数の賞を獲得していることです。なかでもアメリカ先住民文学賞 (el premio de Literaturas Indígenas de América) は特筆に値します。二人とも若いうちから文学にたずさわり、すでに多くの経験を積んできました。若い頃にそれぞれ、ルペルタ・バウティスタはマタモロスと、ソル・ケ・モーは、ユカタンでしばしば活動していたモンテマヨールと知り合っています。ルペルタはつねに詩で受賞してきました。これから見るようにこれまで物語の執筆を行なってきたからです。ソルはというと、詩と物語の二つの形式を混ぜながら創作を行っていて、量的に見てもこの二つの比重は同程度です。ただし、私見ではソル・ケ・モーは物語においてとくに傑出しています。物語作品でより多くの賞を獲得していますし、詩作ではあまり賞の経験はありません。

物語創作において重要だと考える三人目はクリスティーナ・パティスタンです。三人の中ではもっとも若手で、文学にたずさわるようになったのは二人よりも後です。年齢で確認することもできるでしょう。ルペルタ・バウティスタは 1975 年生まれ、ソル・ケ・モ

ーは1978年に生まれです。クリスティーナ・パティスタンは1993年生まれです。クリスティーナのことは後で詳しく話しますが、現時点ではようやく一冊目となる著書を出版したところです。ルペルタ・バウティスタやソル・ケ・モーとは異なり、クリスティーナが筆を執りはじめたのはごく最近のことです。ただし、ルペルタやソルが当初詩を書いていたのに対して、クリスティーナは小説とくに短編小説に専念していることは特筆に値します。メキシコのマヤ系言語の小説創作においてはこの三人が傑出しています。他の言語で物語を書く女性はいるかもしれませんが、それでも最近の出来事だと言えます<sup>6</sup>。この三人は、出版した作品の数はそれほど多いとは言えないかもしれませんが、それでも少なくとも一冊の単著を出したことがあります。また、州や国レベルあるいは国際的なレベルで芸術祭や文学イベントで際立つ存在です。ソル・ケ・モーについて言えば、日本で開催されたイベントに登壇したことがありますし、日本語やアジア圏の言語へ翻訳された作品もあるはず<sup>7</sup>です。

ここで提起したいのは、文学創作にたずさわるといことが実はある複雑さを抱えているということ。比較はしませんけれども、『ポボル・ブフ』や『チラム・バラム』といった初期の書物があり、70年代、80年代に作家の育成が始まり、その過程を経た後、現在マヤ系言語において物語作家として存在する女性はこの三人です。たった三人なのです。もちろん、メキシコにはスペイン語で書く女性の作家は一定数に上ります。また詩の世界には、スペイン語以外のメキシコの言語で書く詩人はある程度います。その意味で言えば、先住民の言語で物を書くのはこの三人に限りません。けれども、物語に関しては女性作家の数がぐっと絞られる。私がここで紹介している三人なのです。

三人のうち、ツォツィルであるルペルタ・バウティスタとクリスティーナ・パティスタン、この二人の経歴についてももう少し紹介しましょう。まず一人目はルペルタ・バウティスタです。ルペルタはチアパス州サンクリストバル・デ・ラスカサス市に生まれました。私が今いる場所ですね。彼女の受賞歴のうち特筆すべきは、先住民言語の詩作に送られるパット・オタン賞 (Pat O'tan) です。この賞は彼女の初単著に送られました。ルペルタ・バウティスタが初めて作品を発表したのはマタモロス編集の共著『呼び覚ます言葉』だという話を先ほどしましたね。『呼び覚ます言葉』に収められたこの初発表作をさらに広げて作られたのが『体験 *Ch'iel K'opojelal / Vivencias*』であり、この作品でパット・オタン賞を2001年に獲得したのです。この賞を受けて『体験』が一冊の本として刊行されることになりました (2004年にCELALIより刊行)。これが彼女にとって初めての単著となります。『体験』ではチアパスにおける政治的混乱や武装抗争について語られています。とくに、一人のツォツィル女性としてルペルタ自身にも影響をおよぼした出来事、1997年のアクテアル村での集団虐殺をとりあげています。当時はチアパスで武装抗争が生じていて、

---

<sup>6</sup> この講演が行われた直後に、ツォツィルの作家マリア・ビクトリア・ディアス (1995年生) がアメリカ大陸先住民文学賞を受賞している。マリア・ビクトリア・ディアスは、ミケル・ルイスとクリスティーナ・パティスタンとともにツォツィル作家集団 *Jal K'opetik* を立ち上げた一員。この集団については本文で後述される。受賞作が収められた『愚かしい男 *Sokem viniketik / Hombres absurdos*』が2025年12月に刊行された (以下のリンクよりPDF版が閲覧可能: <https://editorial.udg.mx/gpd-sokem-viniketik-hombres-absurdos-9786075817149-6903ce594462f.html>)。

<sup>7</sup> 吉田栄人訳『穢れなき太陽』(2018、水声社)。吉田栄人訳『女であるだけで』(2020、国書刊行会)。

この頃にルペルタ・バウティスタは詩作にとりかかりはじめたのです。アクテアルの集団虐殺では、45人の先住民が死亡し、25人が重症をおって病院に送られました。チアパスで起こったこの事件は、メキシコの歴史上でも深刻な出来事の一つとして考えられています。この事件の中枢にはメキシコ政府と関わりのある準軍事組織が関与していたという事実があります。この出来事はルペルタの詩作全体にわたって大きく影響を与えており、作品のほぼすべてにおいてその痕跡がみられます。

ただし、二冊目の単著『母なる大地の満ち欠け *XChamel Ch'ul Balamil / Eclipse en la madre Tierra*』(2008、CDI)では異なるテーマが扱われています。祖先のことや日常のこと、陶芸職人や祈祷者や助産師など様々な活動に従事するツォツィル女性の姿が語られます。女性が先住民コミュニティで生きるうちに経験する暴力が響く詩作です。男性からの強要やマチスモに関連づけられる暴力ばかりではなく、メキシコの政治そのものが含意する暴力もまた表現されている。つまり、概して先住民が政治的にも身体的にもあらゆる場面で差別されてきたならば、女性はまさに女性であることによってさらなる暴力を被ってきたのだという、その経験が綴られているのです。

三冊目の単著である『光の織り模様 *Xojobal, Jalob te' / Telar luminario*』(2014、pluralia)は日常生活に関する思考が試みられた作品で、私なりの言葉で言うと哲学的と呼べるようなテーマが立ち上がっています。作者は先住民の女性、男性として主体性を形成すること、自然や世界との繋がることについて考えをめぐらせている。ツォツィルの男女の生活を軸とした思索の下に、言葉が詩的なつながりをみせ、ひとつの『光の織り模様』という詩集としてまとめられています。

その数年後、ルペルタは四冊目の詩集『卑しい言葉 *Me'on ts'ibetik / Letras humildes*』(2020、UNAM)を発表します。当時、版元のUNAMという大学は元来の言語で書く作家も含めた刊行プロジェクトを始動しようとしていました。このUNAMのシリーズで先住民の女性作家として最初に刊行したのがルペルタ・バウティスタでした。『卑しい言葉』は先住民コミュニティへの暴力や女性への暴力という主題にあらためて立ち返っています。政治的で思索的な、ルペルタらしい作品です。公的言説に異を唱え、差別や人種主義について議論するなかで、ルペルタは詩的な言葉を展開しながらツォツィル語をテキスト上で響かせ、うたい上げています。ここまでがルペルタ・バウティスタが行ってきた詩作のおおよその全体像です。

今度はもう一人のツォツィル作家、クリスティーナ・パティスタンの経歴について見てみましょう。クリスティーナは2021年に物語作家として歩みはじめます。同年に文学創作の修了コースに参加したわけですが、つまりこれはごく最近のことですよね。この修了コースは、通称UNEMAZ(マヤ・ソケ作家連合)という民間団体がサン・クリストバル・デ・ラスカサス市で開講したものです。同コースには、ツォツィル語やツェルタル語話者の若者が参加しており、参加者の作品が『ジャガーの詞 第2巻 *Sk'op Bolom Sk'op Choj / Palabra de Jaguar volumen 2*』(2021、UNEMAZ)としてまとめられました。私はセミナーの講師かつ本の编者としてこのプロジェクトに関わりました。この本にクリスティーナがツォツィル語とスペイン語で書いた初の短編小説が収められています。これは単著では

なく、他の作家の作品とともにまとめられたアンソロジーです。

また、『傷をもつ物語 *Yayijemal ts'ibetik / Cuentos con cicatrices*』（2023、Abriendo Caminos）という別のアンソロジーにもクリスティーナの作品が収められています。この本もまた私が編集を担当した本であり、主宰する文学ワークショップの成果として刊行したものです。ワークショップの参加者は UNEMAZ の修了コースよりもかなり数が限定されており、三人の女性と三人の男性で構成される小さなグループです。彼女ら・彼らの作品が『傷をもつ物語』という一冊の共著として出版されるにいたりました。この本でも暴力が主題となっていますが、ここには男女六人のそれぞれに異なる六つの視点があり、六つの声がある。クリスティーナ・パティスタンは若者の間にある暴力を取り上げています。

さらに、クリスティーナはデジタルメディアでも作品を発表しています。これらはインターネット上で閲覧が可能で、例えば「Tierra adentro」というサイトにアクセスすれば、クリスティーナの二つの読み切り短編小説を読むことができます。タイトルは「シサク Sisak」と「日雇い労働者 Sa'abtel li bat / La jornalera」です<sup>8</sup>。他にも、例えば「Sinfin」というデジタルマガジンには「孤児 Me'onetik / Huérfanos」という短編作品が掲載されています<sup>9</sup>。ここまでの話をまとめると、クリスティーナ・パティスタンは 2021 年からとても精力的に小説を書きはじめ、縦横に様々なメディア（本でもデジタルマガジンでも）で作品を発表しているのがわかります。こうした開拓を通して、クリスティーナは独自の視点、独自の声を形成してきた。そしてそれはこれからお話する初の単著へと結実していきます。

ツォツィル女性作家の作品：ルペルタ・バウティスタ『イシュバラムエク：ジャガーの星』とクリスティーナ・パティスタン『チウレラル』

それでは、ここからは二冊の本に焦点を絞って時間の許す限りお話していきます。この二冊というのは、ルペルタ・バウティスタの短編小説『イシュバラムエク：ジャガーの星 *Ixbalam-ek' / Estrella Jaguar*』とクリスティーナ・パティスタンの『チウレラル *Ch'ulelal*』です。

ルペルタ・バウティスタはチアパス元来の言語で書く女性作家では一世代目にあたりませんが、小説を発表したのは近年に入ってからです。それがこの『イシュバラムエク：ジャガーの星』です（2023、Oralibrura Cooperación Editorial）。イシュバラムエク *Ixbalam-ek'* の接尾辞エク (*ek'*) はツェルタル語で「星」、そしてバラム (*balam*) は「ジャガー」となります。スペイン語にそのまま訳すと「ジャガーの星 (*Estrella Jaguar*)」となりますね。ルペルタはこの作品をまずツォツィル語で書き、その後みずからスペイン語に訳しました。バウティスタ本人から聞いたところによると、この小説を仕上げるのに十年の期間が必要だったそうです。年単位の規模のプロジェクトだったということです。想像してみてください

<sup>8</sup> <https://tierraadentro.fondodeculturaeconomica.com/author/cristina-patishtan/>.

<sup>9</sup> <https://www.revistasinfin.com/autor/cristina-patishtan/>.

さい。たしかに三十ページ程度の短編にそれほどの期間を費やす必要があるのかと問うことも可能でしょう。ただ、本は一冊一冊それぞれの時間を有していると私は言いたい。それに、この本のような類はその価値に値すると思います。ルペルタ・バウティスタという作家が私たちに届ける作品の質を考えるだけでも十分なのですが、この作品が語る物語そのものが大変示唆に富むものです。

この作品では、六世紀に生きたある一人のマヤ女性が送る日常生活がその情景とともに再現されています。六世紀という時代、マヤ文明における生活とはどういったものだったのでしょうか。とくに、ある若い一人の女性で、なおかつ女王という立場の人物はどんな生活を送っていたのか。主人公はイシュバラムエクという名の女王です。女王の日常生活やマヤ文明の生活にまつわる語りのなかで、王国が抱える困難やこの特定の時代空間における生活様式に関する作家の問題意識が私たち読み手に投げかけられます。

千年以上前の日常世界をどのように組み立てて再現するのか。その世界観を文学的にどのように再構築するのか。ルペルタ・バウティスタは創作（フィクション）の手法でそれを試みたわけですが、だからといってドキュメンタリーほどの調査は不要だったというわけではありません。私が重視したいのは、千年以上前のマヤ世界における日常生活についてルペルタが行った歴史文書を用いたあまたの調査です。考えてみてください。子どもたちの生活、女性の生活はどんなものだったのだろうか。他の国々とつねに戦争状態にあるような王国で彼女らはどのように生きたのだろうか。これらのことをふまえて創作されたのがこの作品です。

作品では、女王イシュバラムエクの生き様に加えて、夫サクバラムが戦争で殺され、代わりにみずから国を治めることになった後の女王の姿が描写されています。この作品は短編です。物語は断片的な構造になっていて、時系列で語られるわけではありません。読み手はフラッシュバックや記憶によって出来事を知ることになります。主人公の幼少期、両親との生活、結婚生活、王国を統治することになった経緯、他の王国——統治者は当然のごとく男です——と一人の女性である自分が対峙するというイシュバラムエクの困難、といったことが語られていきます。

また、女王の助言者となる人物たちも登場します。その一人にコムコムという人物がいます。この人は小人で、有識な相談役として活躍します。政治的局面で王国の平和を維持する方へと主人公を導いていく。他国と向き合いつつ、軍事的抑圧をとめないかねない戦争状態に陥らないよう模索するのです。今日から考えれば、当時のことで不明瞭なことは山ほどあり、マヤの生活を具体的かつ明確に示す文書は存在しない。むしろ、実像はそこまで重要ではないのかもしれない。あくまで文学という装置のなかで作上げられた話であって、その意味においてルペルタが書き上げた小説世界は一つの傑作なのです。

さらに、この作品世界には大変面白い仕掛けがあって、それによってわたしたちと『ポボル・ブフ』の間であらたな接続が図られています。主人公イシュバラムエク Ixbalam-ek' の名前は『ポボル・ブフ』に登場する双子のうちの一人イシュバラムケ xbalanque と相似していますね。双子のもう一人はフナフプ Junajpu です。この二人は地下世界へ行き、その世界の住人とフエゴ・デ・ペロタ（球技）で勝負します。いわば、双子は英雄的な人物として地下世界という異次元の世界の住人と対峙し、さらに別のエピソードで太陽と月へ

と姿を変えます。これが一般的に知られる『ポポル・ブフ』ですね。

『ポポル・ブフ』のいくつかのエピソードに登場する双子は二人とも男性です。けれど、ルペルタが調査し考察を重ねたところ、これが非常に興味深いのですが、双子の男児として理解される二人のうち、イシュバラムケは女性の名前だとわかったのです。イシュ (x) という接頭辞は通常、女性を指すときに使われるものであり、男性の場合は j の音の接頭辞がつく。ルペルタが提起しているこのことから多方向に考えを膨らませることができます。『ポポル・ブフ』の双子が実際には女性だった可能性もあるのではないかと。実際は女性だったけれども、翻訳の際、スペイン語における言語学の問題だけではなく宗教や政治の問題も含めて、『ポポル・ブフ』という本が作り上げられていくなかで男性に「翻訳」されたのではないかと。あるいは、もしかしたら西欧の規範に寄ったりカトリック的宗教観念が浸透したりして、男女の双子の物語ではなく、二人とも男性ということになったのではないかと。いずれにしても、『ポポル・ブフ』はこれまでに様々な局面に立ってきたはずですが、今日においてそのことを確かめる術はありません。何がどんなふうにかかったのかを実証することはできないのです。けれども、『ポポル・ブフ』として私たちが知っている作品の翻訳過程にはあらゆるイデオロギーの介入があっただろう可能性については検討の余地があると言えます。

ルペルタ・バウティスタが提起する問いをまとめてみますと、x のつく名前をもつ女性がいたとしてその女性がどんな社会を生きたのか、そして、どうして王国を統治した女性の姿は語られてこなかったのか、ということです。女性の主導者による統治の時代があったことは、たとえばチアパス州にあるパレンケ遺跡からわかっており、今日私たちの知るところです。赤い女王 (レイナ・ロハ) として知られている人物です。この人物はマヤの一時代を統治しましたが、これまでこうした女性の統治者の像は表に出てきませんでした。ルペルタ・バウティスタはこのことに想像力を働かせて文学作品のなかで再現した。それによって女性の主導者がたしかに存在していた事実を伝え、イシュバラムエクと名づけた小説の中でその人生を探求しようとしたのです。

では、ここからはクリスティーナ・パティスタン・ロペスの『チウレラル Ch'ulelal』(2024、Centro Cultural Tijuana) を見ていきましょう。オリジナル版はツォツィル語で書かれ、後にスペイン語訳があてられました。クリスティーナは元来言語短編文学賞テツェエボ賞 (Tetseebo) を 2022 年に受賞し、それを機にこの本の刊行にいたりしました。テツェエボ賞はメキシコのティファナという地域にある文化機関が主催する賞ですが、ティファナはメキシコの中でこちらとは反対側の最果てに位置しています。つまり、チアパスは南の境、ティファナは北の境にあります。

この文学賞が授与されたのはクリスティーナが二人目です。『チウレラル』は、受賞作品に加えて、それ以前に個別に発表されていたものと初出のものが収められ、あわせて六つの短編作品で構成されています。この本でクリスティーナは老若男女のツォツィルの人々が現代に生きる姿を描いています。ルペルタの先の作品とは異なりますね。ただし、実際のところ先住民の世界において現実社会が示す事象は過去の事象と交差関係にあり、それが今日の日常世界について語る際にも表れてきます。現実とは別世界

として理解されるのではありません。私たちの日常空間というものはいくつもの次元によって構成されることで成り立っていると考えられています。ツォツィルの世界では夢空間の次元も現実の一部ですし、夢と現実とは切り離せない関係です。この二つの要素によってこそ人間社会は構成されるのであって、ときには一人一人の存在を理解するためにこの二つを交差させて考える必要がある。夢もまた現実なのであって、予言したり、人々に起こった出来事について判断したりするために重要なものです。

また、夢以外にも別の次元が存在します。今回の場合でいえば、物理的には認知しえない存在、つまりチウレルという存在です。チウレルは「魂」としてしばしば理解されますが、これとは別に「ナワル」としてとらえることもできます。ナワルとは、ある人間が生を受けてから死ぬまでつねにそばに寄り添う動物存在のことです。人の性格や性質はナワルの種と関係があると考えられています。ある人がどのように物事と向き合い、現実世界の中でどのように行動して振る舞うのかということはそのナワルの立ち居振る舞いが根拠になる。ナワルは二つの次元で存在することができます。一つは夢空間で、そこでは目には見えない形で現れる。そしてもう一つが現実空間で、ここではナワルの姿は目に見える。

これは異なる文化圏でも共有しうる考えだと思うのです。たとえば、夜10時頃に細い通りを歩いていると、ふいに黒い犬が姿を現した。この時間帯にそんな場所であるということになると、たいてい人は日中に出くわす黒い犬と同じようには理解しません。人通りのない夜に現れたのなら、それは普通の犬ではなくてナワルだと考えられる。ナワルは人の守り主であると言われていています。それが小道や山でなにか食糧を探しているのです。

クリスティーナ・パティスタンの『チウレル』という本では、こうしたツォツィルを含めたマヤの世界観が文学的な要素となっています。この本の最初のページにある短編作品「チウレル」では、チウレルという存在が棲むための空間として人の身体を探し求める様子が描かれます。現実世界において食糧を得るため、物色するための装置として人間の体を利用し、夢空間でもまた存在を発揮するという話です。

チウレルは本全体を通して六つの作品それぞれに浸透しています。全作品ともにホラーとまではいかなくとも、さっと恐怖に触れるような、狂気的な感覚をよぶような物語になっている。チウレルが姿を現す現場が実際に描かれますし、これらの存在がある種恐怖の念を呼びさますことはたしかです。ただし、クリスティーナ・パティスタンの目的はホラージャンルの開拓というよりは、むしろ、人間の個体を構成する一部としてあるこうした存在について想起すること、そしてそれが引き起こす狂気について物語ることにあります。この存在ゆえにツォツィルの男女ともに人として成立しえるのですが、それを理解するのはなかなか難しい。ツォツィルの人間はみずからの存在を自然との繋がりを通して認めます。ただし、その繋がりは不調和で友好的だとは限らない。むしろ対抗的で、クリスティーナが描くようにつねに狂気を抱えているのではないのでしょうか。人間の間で上下関係があるところには、別次元においても主従関係が生じる。別世界でも権力間のやりとりがあって、強力なナワルがいれば脆弱なナワルがいる。ある者はほかの者を食糧とし、最終的には、その世界で起きた現象が人間の生世界へと影響をもたらす。たとえば、そうした現象は人の病気や死に関わってくる。ツォツィルの世界では、朝に人が床で亡くなっているとそれはナワルの仕業だと言われます。その人のナワル、チウレルによって死がもたらさ

れた、つまり夢の世界で死を迎えたのだ、ということです。クリスティーナ・パティスタンの作品には、こうしたチウレルのいる世界が織り交ぜられています。

加えて、人々の日常を描く際に作家独自の視点が活かされていることもこの本の特徴です。クリスティーナはツォツィルの女性として得た生活経験を土台にしながら政治的な観点を持ち、現代の社会・文化に対して鋭いまなざしを向けています。女性の性生活に関する探求も含まれます。「火 el fuego / xchanul k'ok」がその一例と言えるでしょう。家で息子を世話するある一人の女性と、アメリカ合衆国へ移民として渡った夫の話です。チアパスの社会では、男が出稼ぎで北へ向かい、女は家に残って子どもたちを育てることは一般に起こりえます。ただし作品が問うのは、この女性たちには常とする生活があり、夫との性生活も定期的に有していたのであり、それが突然ひとり残されたらどうなるのかということです。身体的な異変が起こり、生活にも急激な変化がおこりえますよね。

ここまで、二冊の本について話をしてきましたが、どちらもぜひ皆さんに手にとってほしいものです。それぞれがまったく異なるテーマを扱ってはいるものの、ともに物語として大きな魅力をもつ作品です。マヤ・ツォツィル女性であるこの二人の観点はメキシコの文学に貢献するものですが、他の言語、文化圏においてもこの二人のように力強い声をもつ女性とその視点でとらえた世界が描かれているのでしょうか。こうした声は私たちに、女性が生きる世界について問いを投げかけます。ルベルタ・バウティスタが提起したように先スペイン期の社会は女性にとってどのようなものだったのでしょうか。あるいはクリスティーナ・パティスタンが『チウレル』の作品で示したように、今日において女性はどのような生を歩んでいるのでしょうか。

さて、私は十分に話をしましたので、今度は皆さんのご意見をうかがえたらと思います。

## 質疑応答

――概観として他の言語で書かれた文学と比較した場合、ツォツィル文学をどのように位置づけられるのでしょうか。たとえば、ツェルタル語や他の先住民の言語による文学と比較した場合です。ツォツィル文学にはどのような傾向をみてとれるのでしょうか。

チアパス州ではツォツィル語以外にも多くの言語が話されていて、なかにはツォツィル語のように文字で表される言語もあります。そのうちのひとつがツェルタル語です。ツェルタル語はツォツィル語に非常に近い言語ではありますが、言語としての独自性を有しています。またツェルタル語の作家もいます。ツォツィル語とツェルタル語というこの二つの言語は、文学においては足並みを揃えて歩んできたと言えます。作家の数も出版された本の数もある程度同じですし、質的に考えても大差ありません。

たとえば、ツェルタル語の作家としてホシアス・ロペス・ゴメスを挙げることができます。これまでに最も多く小説を発表してきた作家です。ツェルタル語で物語を書く女性の

作家はいませんが、詩の世界にはかなりの数の女性詩人がいます。とても優れた詩作が発表されているのも事実です。日常に根差した主題がとりあげられています。

つまり、ツォツィル語とツェルタル語は手を取りあって歩んできた。話者数もこの二言語は他の言語と比べると群を抜いています。チアパス州のとくにサン・クリストバル・デ・ラスカサス市においては、ソケ語、チョル語、トホラバル語など街から離れた地域で話される言語に比べると、この二言語の話者は文学セミナーがより身近にあると言えます。このことは裏を返せば、作家育成の修了コースやワークショップなどの学びの空間は、サン・クリストバル・デ・ラスカサス市に集中していることを物語っています。

また、この場で言い添えておくと、私がある文学創作のワークショップを主宰していることはすでに述べましたが、それはツォツィル語による、ツォツィル語話者のための場になっています。『傷をもつ物語』を仕上げたワークショップです。私を含めたツェルタルやツォツィルの作家にとってこうした場は特別なのです。というのも、スペイン語でセミナーを受講すると、作品の校正もスペイン語を介して行うことになるからです。

このワークショップでは各々の作品をツォツィル語で校正します。分析も批評もすべてツォツィル語で行う。スペイン語翻訳へと進むのはその後のことで、ツォツィル語で原文がすべて出来上がってからです。ツォツィル語で読み、書くことに私は長けているし、作品を理解したうえで物語に関する私なりの考えをもってコメントします。そして、作家自身が加筆修正したり再構成をしたりといった工程を踏み、ようやく作品が世に出ていく。クリスティーナ・パティスタンの作品がその一例です。このワークショップは今も継続して行なっています。

私は、元来の言語による文学創作が今非常に重要な時期にさしかかっていると考えています。これらの言語の話者自身がみずからの言葉でみずからの世界観のもとに、そしてみずからの探求によって文学を实践するという責任を引き受けていく。どんな文学を作り上げたいのか。読み手の手に届けたい作品とは。読み手には私たちの言語で伝えることも他の言語で伝えることもいずれもあっていい。

今ツォツィル語ではこのような形で文学作品が生まれているのです。話者による編集や構成の手が入るといふ文学創作のあり方は元来の言語にとってまったく新しい動きと言えます。今後他の地域でも必ず実践されるようになるでしょう。そして、翻訳というのが事実上、次の段階の産物となる。翻訳に重点を置くより先にまずは、私たちの言語で文学創作について議論すること、私たち自身が書く文学の質について話すことを求めていく。こうした実践の積み重ねが今日の時代をつくりあげていくのです。

——チアパスの先住民の作家たちは他のマヤ系言語の作家たちとはどのような関係性を有していると考えていますか。マヤ系の他の言語とは、メキシコ南東部や中央アメリカで話される言語の類を指しています。

以下のことを理解していただければ、おそらく一つの回答が導き出せるかと思います。要点は二つ、チアパスの言語による文学創作が、植民地主義に対する応答というある特定

の政治的意味をもって始まったということ、そして、スペイン語という公式の言語があらゆる文化的かつ政治的公共空間で重視されてきたということです。先住民の言語には場が与えられてこなかった。コミュニケーションの手段としての存在価値を与えられてこなかったのです。教育空間でも二十世紀をとおして排除されてきました。

議論を呼んだ一つの契機として、国家的な文化の形成の関わりのなかで元来の言語の存在意義が問われたことがありました。メキシコでは、スペイン支配の独立から革命を経た頃までの時期がそれにあたります。言語・文化的多様性というものはメキシコという国家を形成するにあたっていくばくの価値があるのかが議論された。このことは中央アメリカや南アメリカでも同様に生じました。ご存知のように、ペルー、ボリビア、グアテマラといった国々は同じような歴史的経緯をたどっています。これらの国々は、インディヘニスモ（先住民擁護運動）を政策として打ち出すことで、一方では西欧由来のものはなんであれ受容し、教育に組み入れ、西欧的規範の下に国家形成を図り、他方では元来の言語が有するあらゆる可能性、そしてその知識形態が社会を構成するプロセスに関与する手段を退けようとした。

これに関連して注目すべきは、カルロス・モンテマヨールとともに記述のプロジェクトを展開し、本を出版した初期の作家たちの多くが小学校の先生であったことです。彼らは、インディヘニスモの政策下で育成されたのではなく、みずからの言語で話し、それを書くことの知識にも通じていた。彼らこそが、私たちの言語がもし消滅してしまったら、私たち自身も私たちの世界観も失われてしまうだろうと考えたのです。あらためて言いますが、これはメキシコだけで起こったものではありません。アメリカ大陸の他の多くの国々でも同様の動きがあった。多少の時期のずれはあれど同様の現象が各地で起こり、ある意味このことが契機となり、元来の言語が公の場でも文学の世界でも表現されるようになっていったのです。

元来の言語で書かれた記述が植民地期にも存在するのは周知のことですが、それは文学としての形態を有しておらず政治文書における記述でした。とくに、カトリック教会がその主要な機能を果たすために先住民言語の表記を利用しました。文学に関して言えば、バイリンガルの教師が必要を感じて政治的活動として始めたことがきっかけだと言えます。これは先スペイン時代にマヤの間で生じたこととも繋がりますよね。言語や知識を記憶する手段を探求することは、植民地化という重い経験を経てなお継続されている。言語知識というのはすぐに消滅してしまうほど貧弱ではない。今日でも戦いは続いていますし、問題はすっかり解消されたというわけではありません。けれどもこの現象こそが当初からラテンアメリカの地域で活動する多くの作家たちを結びつけてきたのです。

——私は普段ボリビアのラパスを中心にケチュアやアイマラの人々と研究活動を行っている者です。世代に関して一つ質問があります。固有の言語で書く作家たちのなかには、70年代生まれの作家がいますね。その後続く形でより若い世代が生まれてきた、と言えます。この70年代生まれの作家世代が登場してきたことについて考えを聞かせてもらえますか。

メキシコにおいて、元来の言語で書く作家の一世代目は50年代から70年代に生まれ、今も存命の者が多いです。わたしはこのことについてつねづね、メキシコにおけるインディヘニスモの失敗と呼べるものと結びつけて考えてきました。メキシコに限定せずとも、イスパノアメリカ全体で国家形成やアイデンティティ構築を掲げたナショナリズム政策の下、スペイン語は公用語として特権性を与えられ、文化政策の基盤となり、教育においてもあらゆる地域で普及が目指されました。とくに教育というのは、西欧主義的規範こそが志向すべき文明の姿、理想的模範であるという考えを根づかせるのに非常に重宝された手段だったはずです。ただし、この考えは征服期以降にもたらされた虚構とも言えます。

こうした考えは時代とともに変化をみせます。メキシコでは50年代に入ると、インディヘニスタ国家機関 INI (Instituto Nacional Indigenista) が設立され、文化的同化や言語統一の政策を担うようになりました。そして、公用言語への統一を図ってバイリンガル教育が計画されました。結果としてこの教育方針は現在も継続されています。スペイン語教育を目的としたこの政策では、元来の言語は完全に消失せずとも副次的な立場にとどめ置かれます。ここには、先住民であってもスペイン語を学ぶことによってこそ他者とコミュニケーションや相互理解が可能となる、つまり「文明的」な言葉を有することになるのだ、という理念がある。こうした差別的な思想が果ては、スペイン語を知らない者は勝者にはなれない、自己の言語しか話せない者には家にこもるしか道はない、これらの者には進化の道は閉ざされる、という考えを一人一人に植えつけていく。

けれども、この教育規範はある意味失敗に終わったと私は考えています。もしなにも問題なく機能していたのであれば、現在元来言語の話者も作家も存在していないでしょう。はたしてカトリック教化は成功裡に終わったのでしょうか。仮にそうだとすれば、私たちのような存在は出現していなかったでしょう。いずれにせよ、結果的に50年代に進められたこのインディヘニスモという政策を通して人々の意識が開かれていったことは事実です。自己の言語についてこそ語る必要があるのだ、という意識が教育者に芽生えていったのです。実は、この一連の話は私にも身に覚えがあります。大学進学を決めた当初、私の関心はスペイン語を学ぶことにありました。自己の言語はというと、話すには足りても読み書きは習得していない状態でした。こうした現状について、教育者の多くが意識を向けるようになった。元来の言語が消失することを傍観しているのではなく、その活性化を図る方がよいのではないかということに気づいたのです。

この動きはだれにでも等しくもたらされたわけではありません。文学ジャンルにおいてもばらつきがある。これまでの動きを振り返ってみると、バイリンガルの教育者の多くは男性であり、女性は後方にまわっていることがわかります。女性が固有の言語で文学を切り開いていくのは時代をさらに経てからになります。歩みはかなり鈍いのです。けれども女性の参加という観点で見れば今日どんどんと加速が進んでいる。女性がみずからコミュニティを出てその目で世界を経験したり、教育課程に進んだりしていることがこの結果を生み出し、様々な場面で女性の存在が可視化されるようになりました。たとえば、私が主宰する作家集団は男女比に差がなく、平等な立場で文学の質を探求しています。私は、女性の参加を促し、彼女たちが作家として自立できる可能性をともに模索し、その観点とそ

の声でみずからが抱える懸念や関心を語るができるよう心がけています。結局、作家みずからが望む方法で語りたいことを語るのがもっとも重要なのではないのでしょうか。

——私はグアテマラ出身のマヤ・キチェです。台湾在住です。グアテマラの作家では、ネグマ・コイ (Negma Coy) やロサ・チャベス (Rosa Chávez) やミゲル・アンヘル・オシュラフ (Miguel Ángel Oxlej) などが頭に浮かぶのですが、これらのグアテマラ作家との関わりの中で先住民作家間のネットワーク強化につながるような近年の出来事はありましたか。

はい、交流はありますね。名前が挙がった作家たちとは、彼女ら彼らがチアパスに来訪したり私がグアテマラを訪問したりする機会があって知り合いました。この観点から言えば、ヒトやモノが移動し接続する場としてインターネットや SNS がその役割を果たしていますね。本という物質的な形を好むという個人的な私の傾向と反するものではあるものの、デジタル空間を介して世界各地で生まれる作品を知ることが可能になるというのは事実です。容易には手に入れない作品も入手できます。私もおかげで何人も作家を知り作品を追うことができます。デジタル空間が交流の場を形成するツールとして活用されることで、作品を読むことが本という媒体を入手せずとも可能となる。物理的に手にすることが難しい作品もデジタルであればより容易にアクセスできます。それが結果的に、私たち固有の言語による私たちの文学に栄養をもたらす豊かにしていくことにつながる。ただし、出版という商業的側面をもつこの文化現象については、元来の言語が文芸出版界に参入した経緯に関して別の観点から考察する必要がありますね。

——先住民言語とスペイン語のバイリンガルという形式ではなく、先住民言語のみで文学作品を創作し、出版することは可能なのでしょうか。

そうですね、ツォツィル語のモノリンガルで書かれた詩集があり、わたしも読んだことがあります。ライムンド・ディアス・ゴメス (Raymundo Díaz Gómez) がチアパス州で出版したものです。ディアス・ゴメスはスペイン語でも詩を書きましたが、出版にいたったのはツォツィル語で書いた詩集『閃光 *Snich tsantselav*』(2007) です。

ここにはある種の矛盾があります。作品の流通を促し、読み手を得ることが今日求められています。この作品はわたしのようなツォツィル語を知る者や仲間うちの間で読まれ、批評もされましたが、他の言語への翻訳がないためツォツィル語空間の外で読み手を獲得できないわけですね。もちろん理想は、他言語への翻訳はそれを専門とする人(翻訳家)に任せることですが、今日にいたってもツォツィル語の文学や詩に造詣のある翻訳家は現れていません。今はまだ育成の段階にあり、手元にある数少ない手段でやっていくしかないのです。だからこそ、私たち作家自身が翻訳にたずさわる自己翻訳については積極的に議論しています。自己翻訳は出版業界と交渉する手段でもあります。出版にこぎつけるた

めには読み手に届くようスペイン語のような公用語に翻訳されなければならないのが現状です。

誰に向けて書くのかというジレンマが抱える矛盾はこれまでに多くの形で現れてきました。別の側面を言えば、ツォツィル語のみで書かれた作品はツォツィルの仲間やコミュニティの人々の手にわたりますが、他方でツォツィル語を国外で学ぶ研究者などがその本を求めることも少なくありません。ときにはツォツィルのコミュニティの中よりも外国など外の世界の方がツォツィル語の作品に関心を寄せる読み手の数が多い場合もあります（チアパス州内に限るとこうした現象が起こることはめったにありませんが）。

このジレンマは行方も知れないままに未知の先へと向かっているのではないのでしょうか。私個人としては、バイリンガルの作家として、ツォツィル語でもスペイン語でも書くことになんら不自由もためらいもなく、同様に読むことに関しても問題はありません。そして、言語を学び活用する人はそのこと自体に関心があるものです。要は、言語をどんな規範において存続させ、文学の生産と流布を継続させていくのかというところに議論の余地がある。私たちはまだ道半ばにいます。ただ私は、最終的な決定権は作家にあると思うのです。もちろん読み手に依存する部分は良くも悪くもあるのですが、最後に判断するのは作家なのです。

——今日紹介された本はどこで手にいれることができますか。

インターネット上で本屋から注文できるとは思いますが、本屋がメキシコ国内あるいは国外の地域のどこまでを網羅しているのかはわかりません。ここ、サン・クリストバル・デ・ラスカサスの街で言えば、La Cosecha という本屋でしたら入手できます<sup>10</sup>。この本屋は配送もしてくれます。本屋に連絡をとって見たら、本を送る手段を模索してくれるかもしれません。あるいは、作家本人と連絡をとるというのも一つです。もしかしたら彼女たちがデジタル版を送ってくれるかもしれません。なにも問題はないと思いますよ。彼女たちも SNS、Facebook を使っています。もしアクセスできる手段をお持ちなら、作家たちと連絡をとってみてはいかがでしょうか。きっと本を届ける方法を考えてくれるはずです。

---

<sup>10</sup> <https://www.lacosechalibreria.com/>